

氏名： 高濱 裕子
所属： 人間文化創成科学研究科人間科学系
職名： 教授
学位： 博士（人文科学）（2000 お茶の水女子大学）
専門分野： 生涯発達心理学・保育学
E-mail： takahama.yuko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード / Keywords

葛藤処理方略／比較文化研究／文化差の発生過程／横断研究／縦断研究
Conflict management skills in children / Cross-cultural comparative study / Emergence process of cultural difference / Cross-sectional study / Longitudinal study

◆主要業績

総数（5）件

- ・ 学術論文 高濱裕子・渡辺利子「家庭から就学前施設への環境移行：幼稚園入園をひかえた子どもをもつ親の関心」お茶の水女子大学『人文科学研究』, 2010,6,95-106
- ・ 学会発表 Yuko Takahama, Tatsuo Ujiie, Jiro Takai, Katsumi Ninomiya, Makoto Shibayama, Hiroko Sakagami, Mayumi Fukumoto. &O0a;A cross-cultural comparative study of the development of conflict management skills in children. 2009 SRCD Biennial Mee
- ・ 学会発表 高濱裕子「3歳から就学期までの環境移行と社会化プロセス（4）：子どもの入園から半年後に親が記述した印象的なエピソードの分析」日本発達心理学会第21回大会 神戸国際会議場
- ・ 学会発表 濱家徳子・氏家達夫・高井次郎・高濱裕子・柴山真琴・福元真由美・坂上裕子・二宮克美・近江玲・島義弘・中山留美子・松井宏樹「葛藤処理方略の文化差の発生過程（5）：日中韓の幼児・児童の葛藤処理方略」日本心理学会第73回大会 立命館大学
- ・ 雑誌掲載文 高濱裕子「デンバーでの比較文化体験」幼児の教育 第108巻 第10号 4-7

◆研究内容 / Research Pursuits

「葛藤処理方略の文化差の発生過程についての比較文化的研究」（科学研究費補助金B：連携研究者）

第一次反抗期以降、家庭での社会化や就学前施設（保育所・幼稚園）および小学校での文化化の結果として出現すると予想される処理方略の文化差を検討する。発達過程に焦点化した比較文化的研究は、おそらく本研究が世界で初めてのものである。2009年度は、2008年度の縦断研究の対象者を追跡調査した。すなわち、日本、中国および韓国において、4歳児のコホートと6歳児のコホートそれぞれ50名を対象とした。内容は、家庭訪問による親への面接、親子課題、子ども課題であった。

「3歳から就学期までの環境移行における社会化・文化化についての追跡的研究」（科学研究費補助金B：研究代表者）

研究プロジェクトの目的は次の4点を検討することである。(1) 社会的変化や少子化による対人関係の変化の実情を、他者との対人的調整力（交渉や葛藤処理）という観点から追跡的に検討する。(2) 家庭から幼稚園への環境移行を、新たな環境の認知と環境への定位という生態学的観点から検討する。(3) 幼稚園における遊びと小学校における学習との関係を、幼児期の心情・意欲・態度の発達と小学校での学びの発達という観点から検討する。(4) 環境移行における社会化・文化化を、子どもにかかわる大人（保護者？幼稚園教師、幼稚園教師？小学校教師）の、子どもへの期待と新たな文化化のエージェントへの期待という観点から検討する。

A cross-cultural comparative study of the development of conflict management skills in children.

We examine a cultural difference of the processing of appearance as the result of socialization and enculturation in preschool and the elementary school. As for comparing the cultural research made a focus, this research will be executed to the developmental process for the first time in the world.

We pursued the object person in fiscal year 2008 in fiscal year 2009. The object people were 50 four-years old children and 50 six-years old children of each cohort in Japan, China, and South Korea. The survey content were the interview to parents, the parent and child tasks, and the child tasks by the home visit.

Longitudinal study of socialization and culturalization through environmental transition from 3 years old to period of entering school.

The purpose of this project is to examine the following four points.

1. We examine the fact of the change in the interpersonal relationship according to a social change and the falling birthrate from the viewpoint of personal adjustment with others.
2. We examine an environmental shift from home to the kindergarten from an ecological viewpoint such as recognition of new environment and the locations to the environment.
3. We examine the relation between play in the kindergarten and learning in the elementary school.
4. We examine socialization and enculturation from the viewpoint of developmental expectation of adults and the next agents.

◆教育内容 / Educational Pursuits

学部教育では、前期に「生涯発達講義講読」、「生活科教育論」、「人間関係学」、「児童学概論」を担当した。後期には「発達過程論」、「情緒と発達の心理学」(LA科目)を担当した。

これらの授業科目においてとりわけ意識した点は、親や大人側から見る(とらえる)という視点である。ともすると、乳幼児、児童、生徒側から見たりとらえたりすることが多い。しかし、養育する側(親、保育者)からの見え方やとらえ方を知ること、発達の相互影響性、互恵性に気づくことになる。

「生活科教育論」及び「情緒と発達の心理学」(LA科目)は隔年開講科目であるため、受講者が多かった。最新の研究知見や制度・政策をできるだけ取りあげるように配慮した。

大学院博士前期課程では、「幼児教育課程論特論」、「幼児教育課程論演習」、「保育者養成論演習」、「外書講読」などを担当した。

「幼児教育課程論(特論・演習)」では、幼児教育の特徴である環境を通じた教育についての考え方、カリキュラムについての考え方などについて、文献の講読や受講生の実践をもとに検討した。

「保育者養成論演習」では保育者(幼稚園教諭や保育所保育士)の養成や、その専門性や専門性を支えるさまざまな資源について、内外の文献講読を通して検討した。また受講生が関心をもつテーマを研究の俎上にのせるために、いくつかの論文を取りあげて方法論を含めて検討した。

Under graduate education : I taught 6 subjects in this year. In these subjects, the point that I especially considered is the aspects of viewing from parents and adults side. Because students think seeing from baby, child, and student's aspects to be natural. However, they notice mutual influence and the reciprocity of development through knowing how to see it and how from the side that they bring up to catch.

Graduate school education : I took up the relation between development and the education in the period of infants and children as a theme, and also took up the education through the environment that was the feature of the early childhood education as a theme. And, we read the thesis and discussed about them.

◆研究計画

人間の発達を、より長期的なスパンを射程に入れて追跡し、発達のメカニズムを解明したい。乳幼児期、幼児期、学童期、思春期といったある特定の時期の変化だけを見てはわからない、生涯を通じた人間発達の連続性や変容のパターンについての検討が必要である。このことが、生涯発達心理学の構築につながると考えられる。比較文化研究は、その文化差を明らかにすることを目的とした研究から、状況や文脈による違いに着目した研究へと変化している。さらにわれわれが目指すのは、文化差がどのように生み出されるかといったプロセスへ焦点化した研究である。3年前に、日本、韓国、中国そしてアメリカの幼児から小学生までを対象とした「対人葛藤処理方略の文化差の発生過程についての比較文化的研究」に着手した。さらに文化差の発生過程をとらえるべく、日本、韓国そして中国の3か国における縦断研究を開始した。データセットの規模が大きいため、多様な分析が可能であると考えられる。

◆メッセージ

現代社会におけるさまざまな課題を、発達心理学的な視点をもちつつ検討したいと考えています。

親や保育者などの成人発達のメカニズムには、まだよくわからないことがあります。家庭や幼稚園・保育所などのフィールドに関与しつつ、対象を長期的に追跡するアプローチを採用しながら解明したいと思っています。また、私たちはいかなる道筋をたどって日本人になってゆくのかという疑問を解明するために、日本、韓国、中国そしてアメリカとの比較文化研究に取り組んでいます。社会・経済的变化が、親になるプロセスや家庭の養育機能にどのような影響を与えているのかを、東アジア諸国との比較によって明らかにしたいと思っています。